

第 47 話 (26 頁) 小鳥とたね

えだに小鳥がとまっていると、下の草むらにたねがありました。小鳥が言いました。「ようし、わたしが食べてしまおうと。」

たねに向かってとんでいくと、わなにかかかってしまいました。

「どうして、こんなことに？」と、小鳥は言いました。

「オオタカは鳥たちを生きたままつかまえても、なんともないのに、わたしのほうは、ひとつぶのたねのために身のはめつだ。」

「短い話なのに、とても中身が深い。小鳥の立場から世界や自然を見たら、どう映るのか、と考えると、とても納得できないよ。」

「どうして、こんなことに？ 草むらの種を見つけて一目散に急降下したら、わなに掛かっちゃった。そのときに小鳥がつぶやいた言葉に、とても実感がこもっている。この話の核心だね。」

「ポイントは理不尽、そこに尽きるよ。小鳥から見たら、世の中は非合理で不公平で、全く道理に合わない。」

「その対比で、オオタカが出てくる。空を自由に飛び回り、飛んでいる鳥たちをつかまえて食べてしまう。小鳥が弱者、小国なら、強者、大国のオオワシは、気ままに何でも我が物顔に出来て捕まえられる心配もない…」

「小鳥の恨み節が聞こえてくるようだ。自分はずつましかにせめて種ぐらいはと口に入れようとしたのに、という気持ちだろう。」

「その種も、沢山じゃなくて『ひとつぶ』とあえて強調している。」

「わなとだけあるけど、種をまいてその上に網を張って置いたのかな。」

「原文にも『網にかかった』とはっきり書いてある。」

「この小鳥、網を仕掛けた人間に食べられてしまったんだね、きっと。」

「ところで、そんな強いオオタカだって、やっぱり理不尽な扱いを免れていなかった。」

「自然界の常で生息地は減り続け、剥製や飼育目的の密猟も後を絶たないという。オオタカからすれば、やっぱり理不尽な仕打ちだろうね。」

「小鳥に話を移すと、こっちは種を食べることで、それを遠くまで運び、植物の繁殖を助けている。弱者ながら、十分、世の中に役立っていることになる。」

「ふーん、なるほど。」(一同、顔を見合わせてうなづく)

「ポイントの理不尽だけど、いまの子どもたちには無縁の言葉じゃないか。何でも望めば自由に手に入り、我慢することを知らない傾向があるから。そんなことも、ちょっと気になったよ。」